

6 宇部の精神(こころ)を知る

この言葉に注目! 「ナンバ押せ押せ」

南蛮音頭

ハー南蛮押せ押せ押しゃこそ揚る
揚る五平太の ヤットコセ
堅坑掘りヨ サノ
(アト山サキ山お前はバンコかギッコラサ)
揚る五平太の ヤットコセ
堅坑掘りヨ
ハー宇部の五平太は南蛮で揚る
揚る五平太に ヤットコセ
花が咲くヨ サノ
(アト山サキ山お前はバンコかギッコラサ)
揚る五平太に ヤットコセ
花が咲くヨ
ハー花じゃ蕾じゃ押せ押せ南蛮
枝に実もなりゃ ヤットコセ
葉も茂るヨ サノ
(アト山サキ山お前はバンコかギッコラサ)
枝に実もなりゃ ヤットコセ
葉も茂るヨ
ハー南蛮南蛮はご先祖さまが
あれは炭捲く ヤットコセ
置土産ヨ サノ

作詞:野口 雨情 作曲:藤井清水

地域の盆踊りなどでよく耳にする南蛮音頭です。宇部市に住む人にとっては、とてもなじみのある歌詞ですが、他の地域の人には分かりにくい言葉が並んでいます。



ちなみに、五平太とは石炭のこと、サキ山とは石炭掘りのベテラン、アト山とはサキ山のお手伝いをする人、バンコとは石炭運搬役を指すそうです。

そもそも南蛮というのも石炭の採掘に使った道具を指します。

江戸時代の末に、南蛮車が発明されたことにより、地下水のくみ上げや石炭の搬出ができるようになり、大規模な採掘が行われるようになりました。かつては、一人の孤独な作業であった石炭掘りは、南蛮車の発明で、大人数が南蛮唄を唄いながらの共同作業となりました。石炭を巻き上げる作業は、主に女性が行いました。この時に唄われていた南蛮唄をもとに、1929（昭和4）年に南蛮音頭が制作されました。

コラム 渡辺翁記念会館のレリーフ

渡辺翁記念会館は、多くの市民に愛されています。会館入口の壁面には、炭坑夫のレリーフがあります。

「キャップランプをつけ、ツルハシをかついた炭坑夫をかたどったレリーフがかざられている。近代日本経済の原動力となった石炭採掘者たちの坑内での仕事ぶりが生き生きと浮き彫りにされている。その彫刻を見つめると、地下三百尺、まさに暗闇の坑内こそが日本経済の下部構造そのものであったことを物語っているかのようだ。」（「ときわ公園物語」から）



この人物に注目！ 福原芳山

ふくばらよしやま

福原芳山は、長州藩の最後の宇部領主であった福原越後の跡継ぎでした。

ふくばらえちご

1847（弘化4）年、萩藩士の粟屋家の子として萩で生まれました。1864（元治元）年、萩藩が京都で禁門の変を起こして敗退後、藩主から家老・福原越後の養子となるよう命じられます。

1867（慶応3）年には、藩の命令でイギリスに渡り、7年後の1874（明治7）年に帰国しました。産業革命を終えたイギリスで、石炭をエネルギー源とした西洋近代の資本主義の実力を見ていたそうです。

イギリスで法廷弁護士の資格を取得した芳山は、帰国後、司法省に入省します。また、私財を投げ打って、石炭の採掘権を買い戻し石炭会社を設立しました。宇部の地下資源が、宇部の人々の手に戻り、これをもとに新しい時代へ出発したといえます。

彼は、宇部に眠る石炭を開発して、イギリスをモデルにした郷土の発展を目指していたのかもしれない。その後、石炭開発を加速させるために計画をたて、実行に移していきます。彼の考えにもとづいて、その後の宇部の発展が生み出されたともいえるでしょう。

芳山は、大阪裁判所や日本の最上級裁判所だった大審院の判事局で法律の専門家として活躍し、満35歳で亡くなりました。



年代	主なできごと
1847	出生
1864	禁門の変 藩主から家老・福原越後の養子となるよう命じられる
1867	海外渡航を志し、イギリスへ
1871	ロンドンのリンカーンズ・イン法曹院に入学
1874	日本人初とされるイギリスの法廷弁護士(バリスター)の資格を取得
1876	司法小丞となる
1878	大坂裁判所判事となる
1881	大審院詰となる
1882	死去

コラム

そうりんじ

福原氏と宗隣寺庭園

宗隣寺は、1670（寛文10）年、福原広俊が菩提寺として建立したものです。宗隣寺の庭園（龍心園）は、もとは南北朝時代に築庭されたものであり、山口県最古の庭園です。また、「夜泊石」や「干潟様」の作庭は全国でも貴重で、国の名勝庭園に指定されています。

また、境内には“福原芳山公 宇部炭田の礎”と書かれ、写真が貼られた碑があります。



この人物に注目！ 渡邊祐策

明治維新の直前に生まれた渡邊祐策は、
1897（明治30）年、34歳のとき、宇部興産の前身にあたる沖ノ山炭鉱を創業しました。

炭鉱の経営を軌道にのせると、「埋蔵量に限りのある石炭を掘りつくす前に、その富を無限の技術に転換しなければならない」という考えから、宇部鉄工所、宇部紡績、宇部セメント、宇部窒素工業、宇部電気鉄道、新沖ノ山炭鉱などの企業を次々と興しました。

また、炭鉱開発を通じて宇部の発展をリードしました。ふるさとのため、そして、そこに住む人々のために、さまざまな事業を興し、電気や水道、鉄道など、都市の基盤を整え、教育や医療などの充実にも力を尽くしました。

さらに、政治の世界にも身を置き、1912（明治45）年、衆議院議員選挙で初当選して以来、4選を果た

したほか、1922（大正11）年には第1回宇部市議会議員選挙で当選、初代議長に就任しています。当時は、国会議員と地方議員の兼務が可能だったとはいえ、旺盛な行動力には驚かされます。

宇部市渡辺翁記念会館は、彼の業績を記念して、1937（昭和12）年に竣工しました。西日本で最も歴史のある音楽ホールの一つであり、多くの人によって広く使われています。のちに有名になる「共存同栄」という言葉は、自らを助けてくれた仲間と郷土への恩返しの言葉と言えるでしょう。



村野 藤吾 作



朝倉 文夫 作

年代	主なできごと
1864	生誕
1897	宇部鉱業組合を創設し、本山炭鉱と沖ノ山炭鉱を創業する。
1909	博愛幼稚園を開園する。宇部電気会社を創業する。
1910	沖ノ山家庭学校を創立する。新川小学校を開校する。
1911	宇部軽便鉄道会社を創業する。
1912	衆議院議員に初当選する。
1914	宇部新川鉄工所を創設する。沖ノ山炭鉱医局を開局する。
1917	宇部紡績所を創業する。
1921	宇部が「村」から「市」になる。
1924	常盤湖畔の土地を買収し、宇部市に寄付。
1926	新沖山炭鉱を創業する。
1934	死去
1936	市民の寄付により建立された渡邊祐策像が完成する。
1937	渡辺翁記念会館が落成する。
1942	沖ノ山炭鉱、宇部鉄工所等、4社が合併して宇部興産が創業される。

この言葉に注目! 「共存同栄」「協同一致」

宇部市は、1921年（大正10）年、「宇部村」から一躍「宇部市」へと変わりました。

石炭業が飛躍的に発展し、宇部炭の生産量は1912（大正元）年に23万5000トンだったものが1918（大正7）年には100万トンを突破しました。こうした産業の発展に伴い、人口も爆発的に増えて、1920（大正9）年には4万人を超えました。

宇部を「村」から「市」へ発展させる基礎を築いた渡邊祐策が好んで用いた言葉が「共存同栄」「協同一致」です。

「宇部の石炭はいずれなくなる。その時のために工業を興さねばならぬ」という渡邊祐策はじめ先人の考えが今日の宇部市の基礎となっています。

渡邊祐策等の功績により、当時の宇部は次々と整備されていきました。1911（明治44）年には、宇部軽便鉄道（その後の宇部鉄道）の敷設が始まり、1914（大正3）年に運転が始まります。あわせて、人々の暮らしに欠かすことができない教育や医療等の施設を充実させていきます。1910（明治43）年には新川きょうぞう小学校が建てられました。いまでも新川小学校の玄関には、創立者の渡邊祐策の胸像が飾られています。

また、1914（大正3）年には宇部徒弟学校、1919（大正8）年には宇部中学校（現在の県立宇部高等学校）を設立し、人材を育成しました。

さらに、1914（大正3）年には沖ノ山炭鉱医局（その後の沖ノ山同仁病院）が開局しました。



新川駅構内の宇部軽便鉄道の機関車
（常盤館発行の絵葉書・宇部市立図書館附設資料館蔵 うべ歴史読本より）



1920（大正9）年に建てられた
木造2階建ての沖ノ山同仁病院
（「市制記念写真帳」うべ歴史読本より）



創立当時の新川小学校（絵葉書「宇部百景」うべ歴史読本より）



宇部中学校（大正15年刊「宇部市写真帳」うべ歴史読本より）

この言葉に注目！「宇部方式」そして「SDGs」へ（1）

「ハナ毛をのばして歩こう」

当時のある週刊誌は、大気汚染の問題を取り上げ、こんなキャッチフレーズをつくったそうです。記事によると「宇部市の動物園で、サルがバタバタと死んだ。死因を調べてみたら、いずれも肺が煙で真っ黒、それに驚いたことにはハナ毛がないはずのサルに、ハナ毛が生えていた。笑い話ではない。同市の学童のハナ毛も他の地区の学童より長いことがわかった。生命が自然の法則によって煙害に抵抗している証拠だ。」とあります。

サルにハナ毛があるなしはともかく、宇部市宮大路動物園のサルに結核が集団発生し、死んだサルのがんがじん肺症だったことは事実だったようです。宮大路動物園は、1960（昭和30）年に開園された宇部市の都心部にある小規模な動物園でした。調査の結果、1965（昭和35）年までの5か年に、67匹のサルのうち19匹（28%）が死にました。そのうち、15匹（80%）がじん肺症でした。その後、この動物園は郊外のときわ公園に移転しました。宇部市の大気汚染のすごさを物語っていると言えるでしょう。

しかし、下の写真を見てください。その後、宇部の空は見る見るきれいになっていきました。宇部市は、一体どういう方法で大気汚染を克服していったのでしょうか。



当時の新聞記事（昭和25年6月）



1950年代



1970年代



1980年代

宇部市では、「宇部方式」とよばれる方法によって、煤塵を減らそうとしました。「宇部方式」とは、法律や規則によらず、科学的データに基づいた学識経験者と自治体と企業と住民の4者の話し合いによる地域社会の自主的な規制によって、公害を未然に防止する方式です。この「産・官・学・民」の連携によって公害をなくそうとする試みは各地から注目されました。

「宇部方式」では、学識経験者の貢献が大きく、降灰の実態調査や健康被害との関係について調べ、目標値を設定し、工場側に働きかけたことが降灰を減少させることにつながりました。工場側は、多額の費用を投じて集塵装置を設置しました。さらに、研究を進めた結果、回収した灰がセメントの混和剤として再利用できることが発見され、いっそう回収が進みました。降灰対策を被害住民の激しい抗議の中で、やむをえず行っただけではなく、自主的に行ったことで煤塵を減らすことができたのです。

この言葉に注目！「宇部方式」そして「SDGs」へ（2）

一般に、公害はその被害住民の抗議行動によってもなかなか解決しないことが多い中で、「産・官・学・民」の連携によって解決したということは、珍しい例と言えるでしょう。

1997（平成9）年には、これまでの「宇部方式」による公害対策の取り組みが国際的にも高く評価され、「グローバル500賞」を受賞しました。これはUNEP（国際連合環境計画）が環境の保護・改善に功績にあった個人・団体に贈っている賞で、国内の自治体としては、北九州市、四日市市に続いて、3都市目の受賞でした。一貫して取り組んできた環境の保護・改善対策が諸外国においても広く活用できるものとして、国際的に評価されたものです。

さらに、宇部市ではグローバル500受賞都市にふさわしい国際環境都市を目指し、1998（平成10）年には「宇部市環境基本計画」を策定し、1999（平成11）年には公害対策を一層推進するため、市内33の企業と「環境保全協定」が締結されました。



グローバル500賞



宇部時報 1997（平成9）年5月2日

そして、宇部市は、この「宇部方式」の実績と「共存同栄・協同一致」の伝統を生かし、近年「SDGs」に取り組んでいます。「SDGs（エス・ディー・ジーズ）」とは、「Sustainable Development Goals」の略で「持続可能な開発目標」という意味です。その目標は下のように17あり、2030年までに世界で達成するように国際連合が掲げています。

宇部市は、国から山口県唯一の「SDGs未来都市」に認定され、今まで取り組んでいた環境問題だけでなくさまざまな人権問題などにも視野を広げ、「産・官・学・民」の連携のもと、この目標を達成することをめざしています。各中学校でも取り組むことができることはたくさんあります。みんなの協力と努力で目標を達成しましょう。



この言葉に注目！ 「緑と花と彫刻のまち」

宇部市は、第二次世界大戦中、空襲により市街地のほとんどを焼失しました。しかし、その後の復興計画は、他の都市より早く、しかも大胆に進められました。戦後早い時期に街路の緑化を図ったことは、全国的に注目されました。



戦後間もない頃の
常盤通り



1960年代の
花壇コンクールの審査風景

このような街路樹の整備と並行して、真締川河畔や渡辺翁記念会館前広場の植樹や市内各所の公園整備が進みました。

また、街路や公園を花で飾る市民運動は、「宇部を花で埋める会」が商工会議所の提唱により発足し、その後、宇部市女性問題対策審議会に引き継がれました。

こうした運動は、1963（昭和38）年に開催された山口国体を機に、学校や子ども会、会社、工場など、幅広い活動として広がりました。特に、1年に2回開催される「花壇コンクール」は、100回を越え、現在も宇部を花いっぱいの街にしています。

年代	主なできごと
1950年代	50 緑化事業に着手 51 平和通りに緑化 51～52 常盤通り～沖ノ山線緑化 53 平和通り～常盤通りの緑化で建設大臣表彰 55 宇部を花で埋める会発足（商工会議所提唱） 56 市花を「ばら」と定める 58 市民公園を花で埋める運動起こる（女性問題対策審議会） 第1回花壇コンクール開催
1960年代	61 花いっぱい優良都市に選ばれる 62 市民の森造成運動起こる 63 国体の花いっぱい運動始まる 宇部市のキャッチフレーズ「緑と花の工業都」決まる 64 香りの森造成運動起こる 66 宇部市緑化運動推進委員会発足 花いっぱい一鉢運動起こる 67 明治百年記念の森運動起こる 街頭風船募金始まる
1970年代	72 市花を「サルビア」と定める 市木を「くすのき」と定める 74 市民植樹祭始まる 79 人生記念植樹始まる
1980年代	83 緑の都市賞「建設大臣賞」受賞 84 全国花いっぱい連盟から「花いっぱい功労団体」表彰 87 緑化推進運動功労者「内閣総理大臣賞」受賞 都市景観モデル都市に指定 89 宇部市のキャッチフレーズ「緑と花と彫刻のまち」へ「潤いのあるまちづくり」優良地方団体で自治大臣表彰
1990年代	90 ときわ公園が「さくら名所百選」に選出 91 真締川周辺地区が「都市景観百選」に選出 94 常盤通りが「新日本街路樹百選」に選出
2000年代	04 楠町の合併に伴い、「ツツジ」も市花となる
2010年代	11 花壇コンクール100回 「花いっぱい運動記念ガーデン」オープン

コラム 花いっぱい運動

1955（昭和30）年に「宇部を花で埋める会」が発足し、住みよい環境をめざす市民運動として「花いっぱい運動」が開始されました。この運動の牽引役^{けんいんやく}を果たしたのは、当時、市の教育委員・女性問題対策審議会委員を務めていた上田芳江さんです。喧嘩の絶えなかった場所に花壇を作り、花を植えることから始めたそうです。

花いっぱい運動と彫刻で飾る運動は、ともに荒廃した街に人間性を取り戻し、豊かな文化の街を創りたいという当時の人々の願いがこめられていました。

この言葉に注目! 「UBEビエンナーレ」

宇部市を象徴するものの1つに「彫刻」があります。宇部市には、約360点の彫刻があります。そのうち、約半数は彫刻展の開催される常盤公園に、残り半数が市街地に展示されています。都市の景観をよくしたり、生活する場所で芸術を鑑賞したりといった「うるおいのあるまちづくり」に加え、これまでおよそ50年におよぶ彫刻展の積み重ねによって、まち全体が野外彫刻の美術館となっていると言えます。

第1回現代日本彫刻展の様子



年代	主なできごと
1950年代	58 花いっぱい運動のために集めた種子代の一部で彫刻を展示
1960年代	61 宇部を彫刻で飾る運動が起こる 常盤公園で第1回野外彫刻展を開催 62 「蟻の城」を展示 63 常盤公園で第1回全国彫刻コンクール応募展開催 65 常盤公園で第1回現代日本彫刻展を開催 〈第2・3回現代日本彫刻展を開催〉
1970年代	〈第4～8回現代日本彫刻展を開催〉
1980年代	〈第9～13回現代日本彫刻展を開催〉
1990年代	〈第14～18回現代日本彫刻展を開催〉
2000年代	〈第19～24回現代日本彫刻展を開催〉 ※第22回から国際展として海外への公募を開始 ※第23回から「UBEビエンナーレ」と名称変更
2010年代	11 第24回UBEビエンナーレを開催(50周年) 19 第28回UBEビエンナーレを開催

この彫刻展についても、はじめのころは市民から「一握りの人しか理解できないようなものに市のお金を使われては困る」「そんなところへ使うお金があれば、もう少しほかにしなくてはならない仕事があるはず」といった苦情も寄せられたそうです。当時の人々の粘り強い活動があったおかげで、次第に市民の中に彫刻が受け入れられていきました。

その後、1968（昭和43）年に神戸市の「神戸須磨離宮公園現代彫刻展」がスタートし、1969（昭和44）年に神奈川県箱根町の彫刻の森美術館が開館しました。宇部市を含めて、後に「日本の三大野外彫刻展」と呼ばれる展覧会がこの時代に出そろいました。こうした日本全体での広がりの中で、先進的な宇部市の取り組みは高く評価されています。現在では、2年に1度、「UBEビエンナーレ」が開催され、世界中から注目されています。



第27回UBEビエンナーレの様子



第28回UBEビエンナーレの様子

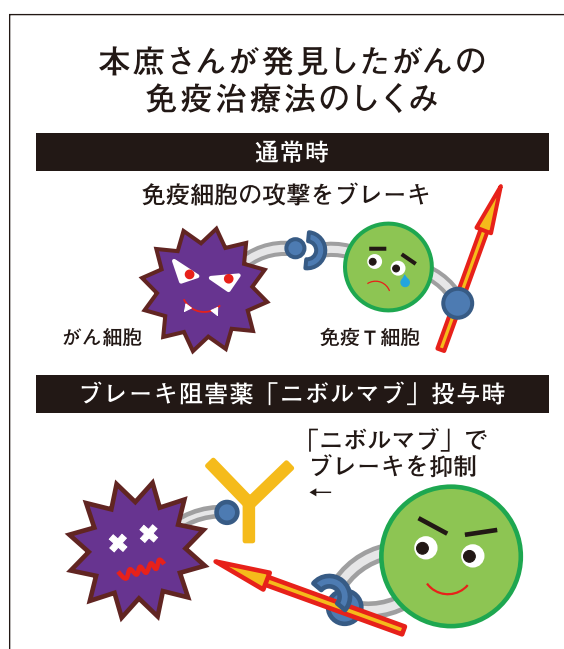
(1) ノーベル医学・生理学賞受賞！

宇部市育ちで京都大学特別教授である本庶佑さんが、がんの新治療法を発見したとして、2018年にノーベル医学・生理学賞をアメリカの教授と共同受賞しました。

ノーベル賞は科学や文学、経済学などさまざまな分野で、後世に残る業績を成し遂げた人だけが選ばれるとても歴史のある賞です。本庶佑さんは、がんの革新的な治療法を切り開いたことが評価されて受賞しました。

これまでのがん治療は、手術によって患部を切除する方法や放射線照射によりがん細胞の遺伝子を切断し分裂を止める方法、抗がん剤などでがん細胞の増殖を止めたり破壊したりする方法が中心でした。これら身体への負担と重い副作用がある治療法をなるべく選択しなくて済むようにするため、「免疫細胞は、がん細胞によってその攻撃にブレーキをかけられている」というしくみに着目し、そのブレーキを阻害する新薬の開発につながる研究を行いました。

この新しい治療法には、まだまだ乗り越えるべき課題があります。ノーベル賞を受賞しても患者が安心してこの治療法を利用するために、本庶佑さんが発見した新しい治療の研究は、これからも続いていきます。



(2) 知りたい気持ち・よりよいものを求める気持ち

本庶佑さんは、1942年京都市に生まれ、小学校から高校までの間を宇部市で過ごしました。京都大学大学院医学研究科を修了後、大阪大学医学部と京都大学医学部で教授を併任し、1995年より京都大学大学院の医学研究科教授となり、研究科長や学部長を歴任しました。2020年4月からは、京都大学がん免疫総合研究センターのセンター長に就任し、よりよい治療法の開発をめざして研究を続けられています。

座右の銘は、「有志竟成（志を曲げることなく堅持していけば、必ず成し遂げられる）」。

この思いを胸に秘めながら、医学の研究にひた向きに取り組んできたことが、受賞につながりました。

人のために役立つ発見や開発に終わりはありません。本庶佑さんの研究熱心な姿は、何事も途中であきらめることなく、よりよい結果を求めていくことの大切さを教えてくれます。



市民栄誉賞を受ける本庶さん